

# 黙示録における幸いの宣言

原 口 尚 彰\*

## 抄 録

黙示録における幸いの宣言は、キリストの来臨に備えた幸いの宣言と(黙 1:3, 16:15; 22:7), 地上でキリスト教信仰に忠実に歩んだために殉教した人々に対してなされる天上の幸いの宣言(14:13, 16:15; 19:9; 20:6; 22:14)に内容上大別される。前者の系列の幸いの宣言は、キリストの来臨に相応しい備えすることを勧める目的を持つ(黙 1:3; 16:15; 22:7)。黙示録の著者は、時が迫っているという強い終末意識の下に(1:3), 二つの違ったタイプの幸いの宣言を使い分け、黙示の言葉を注意深く聞いて守ることを勧めると共に(黙 1:3; 22:7), 迫害の状況下で殉教者が出る中で、小アジアの教会の人々に来るべき世界の勝利と祝福を告げて励まそうとしたと考えられる。

Key words : 黙示録 幸いの宣言 キリストの来臨 迫害 殉教

## 1. 問題の所在

旧約聖書において幸いの宣言(אשרי 定式)は、文頭にאשריという言葉が置かれ、その後には幸いとされる人を描写する句が続く表現形式であり、申 33:29; 王上10:8; 代下9:7; 詩1:1-2; 2:13; 32:1-2; 33:12; 34:9; 40:5; 41:2; 65:5; 84:5-6; 94:12; 106:3; 119:1-2; 127:5; 128:1-2; 137:8-9; 144:15; 146:5; 箴3:13; 8:32-34; 14:21; 16:20; 20:7; 28:14; 29:18; 31:28; ヨブ5:17; コヘ10:17; イザ30:18; 32:20; 56:2; ダニ12:12等広汎な文書に見られる<sup>(1)</sup>。幸いの宣言(אשרי 定式)は、歴史物語や詩文や格言や預言等様々なジャンルの文書に使用されてい

るが、中でも使用頻度が高いのが知恵の詩編(詩 1:1-2; 112:1; 119:1-2; 128:1-2)と箴言である(箴3:13; 8:32-34; 14:21; 16:20; 20:7; 28:14; 29:18; 31:28)<sup>(2)</sup>。

ユダヤ教における幸いの宣言の用法は、旧約聖書の用法の継承・発展である。幸いの宣言は、外典・偽典文書にも(トビ13:15-16; シラ14:1-2, 20; 25:8-9; 48:11; ソロ詩6:1; 10:1; 17:44; 18:6; エチ・エノ58:2; 81:4; 82:4; スラ・エノ42:6-14; 52:1-15; モーセ昇10:8), 死海文書にも(4Q185; 4Q525)見られる<sup>(3)</sup>。2人称で書かれた幸いの宣言は、ラビ文献に多く見られる(『ミシュナ』「ヨーマ」8, 9; 「アヴォート」2, 8b; 4, 1; 「ケリーム」30.4; 『バビロニア・タルムード』アボダ・ザラ27a; 「ペラホート」21; 61b; 「ヨーマ」87a; 「スッカ」53a; 『エルサレム・タルムード』「アボ

\* Haraguchi, Takaaki  
東北学院大学文学部教授

ダ・ザラ」40d; 「キッドウーシュ」66cd; 「シャツバート」14d; 『トセフタ』「スッカ」4, 2他)<sup>4)</sup>。但し、初期ユダヤ教における幸いの宣言の用例は一般的には知恵文学的な性格を持つものが多いのに対して(トピ13:15・16; シラ14:1・2, 20; 25:8; 48:11; ソ口詩6:1; 10:1; 17:44; 18:6; 4Q185; 4Q525を参照), 黙示文学における使用例(エチ・エノ58:2; 81:4; 82:4; スラ・エノ42:6・14; 52:1・15; モーセ昇10:8)は性格が全く異なり、義人の死後の世界における幸いを主題にしている。

新約聖書において、幸いの宣言は主として、福音書(マタ5:3・12; 11:6; 13:16; 16:17; 24:46; ルカ1:45; 6:20, 21, 22; 7:23; 10:23; 11:27, 28; 12:37, 38; 14:14, 15; 23:29; ヨハ13:17; 20:29), 書簡文学(ロマ4:7・8; ヤコ1:12, 25; ペト3:14; 4:14), 或いは、黙示録(黙1:3; 14:13; 16:15; 19:9; 20:6; 22:7, 14)に見られる。しかし、研究者たちの関心は、山上の説教・平野の説教に出て来る幸いの宣言(マタ5:3・12; ルカ6:20・22)の分析に集中している<sup>5)</sup>。これに対して、黙示録における幸いの宣言に対しては十分な研究がなされてこなかった。本研究はこの研究史上の欠落を補うことを目的としている。

黙示録における幸いの宣言は文体上一貫しており、相互の差は認められないが、内容的に言えば、黙示録中の幸いの宣言は、キリストの来臨に備えた幸いの宣言と(黙1:3; 16:15; 22:7), 地上でキリスト教信仰に忠実に歩んだために殉教した人々に対してなされる天上の幸いの宣言(14:13; 16:15; 19:9; 20:6; 22:14)に大別される。そこで本研究は、幸いの宣言の文体を論じるときは全体を一括して取り扱うが、内容を検討する時は、上記二種の宣言を区別して個々に分析した後に、それを総合して全体的特色を考察することにする。

## 2. 文体論的分析

黙示録の幸いの宣言は、文体的に一貫しており、文頭で $\mu\acute{\iota}\sigma\acute{\iota}\varsigma$ ( $\mu\acute{\iota}\sigma\acute{\iota}\varsigma$ )と述べた後に、冠詞を伴って名詞的に用いられた分詞が置かれる。文頭の $\mu\acute{\iota}\sigma\acute{\iota}\varsigma$ は単数形のことでもあれば(黙1:3; 16:15; 20:6; 22:7), 複数形のこともある(14:13; 19:9; 22:14)。述語動詞(賓辞)はすべての場合省略されており、高揚した韻文の文体を維持している。

黙示録の幸いの宣言はすべて三人称で書かれている。共観福音書伝承の一部(マタ5:11; 16:17; ルカ6:20・22; ヨハ13:17; ペト4:14)や、使徒教父文書の一部(ヘルマス『幻』2.2.7; 『諭え』9.29.3)に出て来る二人称で書かれた幸いの宣言は、黙示録には見られない。修辞的な効果の点から言うと、三人称を用いる場合は、一般原則を宣言することになり、より客観的な発言となるし、二人称を用いる場合は対話的な性格が強まり、聴衆への直接の語りかけの性格が強くなる<sup>6)</sup>。天上での究極の幸いを問題にするので、黙示録における幸いの宣言は、一般的な原則の宣言として三人称を採用したのであろう。幸いの宣言を語る語り手は、天上のキリスト(16:15; 22:14), 天使(19:9), または著者のヨハネである(1:3; 20:6; 22:7)。

幸いと宣言される理由を、共観福音書伝承は $\delta\iota$ に導かれる従属節で示す場合が多い(マタ5:3, 5, 6, 7, 8, 9; ルカ6:20, 21)。これに対して、黙示録において幸いと宣言される根拠は、様々に違った表現で述べられる。ある場合には、 $\delta\iota$ で導かれる文章で示されるが(黙1:3; 14:13), 他の場合には、キリストの来臨が近いことを述べる短い文章が、幸いの宣言の前に置かれることによって示される(16:15; 22:7)。また、幸いの宣言の確かさを強調する言葉が後におかれることもある(19:9)。さらには、接続詞 $\kappa\alpha\iota$ に導かれる従属節が置かれ、幸いの状態を叙述することもある(14:13; 22:14)。

### 3. 内容的分析

#### 3.1 終末に備える者の幸い

黙示録の冒頭には、「幸いである。朗読する者、また、この預言の言葉を聞き、その中に書いてあることを守る者は。その時が近付いているからである。」という言葉がある(黙1:3)。黙示録の著者は、自らの作品を「イエス・キリストの黙示(ἡ ἀποκάλυψις τοῦ ἁγίου καὶ προφητοῦ λέγουστος) (1:1)と同時に「預言の言葉(ἡ προφητεία τοῦ βιβλίου) (1:3; 22:6)であるとしている。批評的聖書学は、預言と黙示の間に概念的な区別を置き、前者が歴史の平面に留まる言説であるのに対して、後者が歴史の終わりについての言説であるとしているが、初代教会にはこのような概念上・言語上の区別は意識されていなかった<sup>(7)</sup>。それは、共観福音書に保存されているQ資料の担い手たちが自らを預言活動に従事する預言者と考へつつも(Q 6:22-23)、世の終わりに関する黙示的言葉(Q 12:39-40; 12:42-46; 12:51-56; 13:28-30; 17:23-24, 26-27, 30, 34-35, 37; 19:12-13, 15-26; 22:28-30)を語った事情と並行している<sup>(8)</sup>。黙示録が黙示であり、預言であるということは、この文書の内容が恍惚状態になって体験した天上のヴィジョン(黙1:9-11)であると同時に、読者(特に小アジアの7つの教会の信徒たち)に語り掛けた神の言葉であるという両義性を表している<sup>(9)</sup>。

黙1:3は、黙示録の文章を朗読する人と朗読された言葉を聞いて書かれていることを守る人の幸いが宣言され、文学作品としての黙示録への誘いの言葉となっている<sup>(10)</sup>。この言葉は黙示録の結び近くの幸いの宣言と内容的に呼応し(黙22:7「幸いである。この書物の預言の言葉を守る者は。」)、黙示録という文学作品全体を幸いの主題が囲い込む構造となっている<sup>(11)</sup>。言葉の忠実な聞き手に対する幸いの宣言は、共観福音書中の一部の幸いの宣言にも並行している(マタ11:6; ルカ7:23)。朗読される預言の言葉を、注意深く聞き、心に銘記することは読者たちに開かれた可能性であり、彼らにその可能性を実現するようにとの勸

めである。従って、この幸いの宣言は、修辭的に言えば、美德を称賛する演示的機能だけでなく、読者に一定の行動を勧める助言的な機能を含んでいる。聞き手に注意深く聞くことを勧める機能は、黙示録に含まれている小アジアの諸教会に宛てた書簡の結びに繰り返される、「耳がある者は、霊が教会に語ることを聞くがよい(黙2:7, 11, 17, 29; 3:6, 13, 22)」という言葉にも認められる(マタ11:15; 13:9, 43; マコ4:9, 23; ルカ8:8も参照)。こちらの方は聞く耳ある者だけが聞けばよいといった秘教的な突き放した調子を持つ<sup>(12)</sup>。

黙1:3の幸いの宣言には、「その時は間近であるからである」という言葉が続き、16:15の幸いの宣言には、「見よ、私は盗人のようにやってくるのだ。」という言葉が前置され、22:7の宣言には、「見よ、私は速やかにやって来るのである。」という天使を通して伝えられた天上のキリストの言葉が前置されている。相応しい備えをする者に来臨の時に幸いが約束されることは、終わりの時の接近(黙1:3)、或いは、キリストの来臨(黙22:7)を目前にして読者が相応しい備えをすることを暗黙のうちに勧めている。

#### 3.2 殉教者に対する天上の幸い

黙14:13は、「幸いである、今後主にあつて死ぬ者は。そう、霊が語るによれば、彼らはその労苦から休むであろう。彼らの業は彼らに伴うのだから。」と信仰のうちにこの世を去る死者の幸いを語る。同様に、黙20:6は、「幸いである、第1の復活に与る者は。」と述べ、信仰者の死後の幸いを宣言している。黙示録19章は、「大バビロン」(18:2, 10, 21)と呼ばれるローマに裁きが下り、この大都市が滅びた後(18:1-24)、天上で勝利の祝いと神の讃美がなされる様を描く(19:1-8)。神の子羊の婚礼の日の到来が告げられた後(19:6-8)、「書き記せ」という天からの声がして、「幸いである、子羊の婚礼に招かれている者は。以上の神の言葉は確かである」と告げられる(黙19:9)。「子羊の婚礼に招かれている者」には、

存命中の者もこの世を去った死者も共に含まれるであろう。

「幸いである、自分の外套を洗う者は。命の木への権利を持ち、門から都へ入ることになる。」(黙22:14)という宣言は、キリストの来臨と個人の業に応じた裁きがなされることを告げる天上のキリストの言葉(22:12・13)続いている。そのため、生前に信仰を捨ててをせず、「外套を洗う」生き方を貫いた者に終末時に祝福が約束されており、祝福の具体的な内容は永遠の命の受領である(「命の木への権利」)。

死後の幸いが語られる背景は、一世紀末の小アジアの信徒たちが置かれていた迫害下の苦難の状況に求められる<sup>(13)</sup>。当時の小アジアの教会が迫害下にあったことは、第一ペトロ書も証言している(ペト1:6・8; 3:12; 4:12・19)。黙示録の著者はしばしば信徒の苦難に言及する(黙1:9; 2:9・10; 2:22; 7:14)。彼らは試練に遭い(3:10)、イエスへの信仰の故に投獄され(2:10)、殉教する者もあった(2:13; 12:11; 13:10, 15; 18:24; 20:4)。特に、苦難の状況は皇帝礼拝の強要に由来しており(13:8, 15; 16:2)、それを拒否する者は殺害された(13:15; 20:4)<sup>(14)</sup>。このような中では、イエスへの *πίστις* とは、信仰であると同時に信実であり、忍耐となる(2:10, 13; 3:10; 14:12)<sup>(15)</sup>。悪の勢力の跋扈と激しいキリスト教迫害が、終末の到来が近いことを確信させ、節を曲げずにイエスへの信仰(信実)のうちに世を去った者に与えられる死後の運命について、黙示的想像力を駆使して天上の世界を描き、永遠の幸いを宣言することが重要となったと推定される。今は悪の力が優勢であり、主を信じる信仰者が迫害され、虐殺されていても、来るべき終末の時には勝者と敗者の関係は逆転し、悪の権化とされるローマ帝国は裁かれるのに対して(17:1・18:24)、迫害の苦難の中でも信仰を捨てなかった者は、天上で白い衣を着せられ(3:4・5; 7:9・14)、究極の勝利を得る者として命の書に名前が記される(3:5)<sup>(16)</sup>。新天新地が到来し、新しいエルサレムが天から下って来て理

想世界が実現する(21:1・2)。神が人と共に住み、人は神の民となる(20:3)。「(神は)彼らの目から涙を拭い去り、もう悲しみも嘆きも労苦もなくなる」(20:4)ので、人は苦しみから永遠に解放されることになる。

死後の幸いを語る幸いの宣言は、ユダヤ教黙示文学に度々出て来る。例えば、ダニ12:12では幸いの宣言が、黙示的文書であるダニエル書の結びに置かれている。12章は終末時における大天使ミカエルの来臨と、その時に命の書に名が記されている義人に与えられる究極の救いを描いている(ダニ12:1・3)。ここで約束されている幸福は、知恵文学が語る繁栄や成功といった地上的幸福ではなく、終末時に与えられる永遠の祝福である。終末的視点が優越し、地上的幸福観を逆転させている点は幸いの宣言の新しい展開である。

エチオピア語のエノク書において、幸いの宣言は三度使用されている(58:2; 81:4; 82:4)。この中で、58:2と81:4に出て来る幸いの宣言は、義人の死後の天上での運命についての言及である。例えば、58:2・6は次のように述べる。

「義人たちは太陽の光の中に、選民は永遠の生命の光の中にあって、彼らの生命の日は終わりなく、聖人のもとに義を見いだす。義人らは永遠の主のもとに、彼らの信実の報いたる義の奥義を天に探し求めるように言われるであろう。太陽が地上を照らすように明るくなり、暗闇は過ぎ去ったのだ。(燃え)尽きることのない光が現われ、彼らの(一生の)日々は数えあげることができない。まず暗黒が滅ぼされ、光が靈魂の主の前に確立され、公義の光が靈魂の主の前に永久に確立されるゆえ。」<sup>(17)</sup>

エチオピア語のエノク書81:4では、天の板を読んだエノクが、「さいわいなるかな、義人また善人として死におもむき、不義を責める書を書かれたことがなく、咎を見いだされない人」と言っている<sup>(18)</sup>。ここでも、生前に義人や善人として生涯を送った人々の死後の世界における幸いが問題になっている。

スラブ語のエノク書42:6は、「幸いである、主の名を敬い、常に御前であって仕え、畏れをもつ

て贈り物をなし、命を献げ、生涯において義しく生きて死んだ人は」と述べる<sup>(19)</sup>。この宣言は、人生において正義を実践し、公正な裁きを下し、弱い立場にある人々に思い遣りを示す義人の幸いを語るが、その最終判断は死後に下される裁きによって示される。人生における成功や繁栄といった世俗的幸福よりも、来るべき世での永遠の幸福が語られているのである。幸いの宣言が彼岸的な領域に移されているのは(58: 2; 82: 4も同様)、黙示文学によるこの文学形式の用例の特色であろう。

山上の説教・平野の説教に出て来る幸いの宣言(マタ5: 3・12; ルカ6: 20・22)も終末論的視点を持ち、各節の後半部では来るべき神の国での運命の逆転のテーマが幸いの宣言の根拠として挙げられている。しかし、聴衆は将来に約束されている運命の故に、地上で生活している今既に幸いであると宣言されており、死後の世界における幸いを語っているのではない。黙示録に出て来る信仰のうちに世を去った死者の死後の幸いを告げる幸いの宣言は(黙14: 13; 19: 9; 20: 6)、新約聖書の他の幸いの宣言よりも、ユダヤ教黙示文学の幸いの宣言と性格を共有していると言える。

さらに、このことはヘレニズム世界における幸いの宣言とも接点を持っている。ヘレニズム世界において、幸いの宣言には、形容詞  $\mu\acute{\iota}\sigma$  (または、その別形  $\mu\acute{\iota}\sigma\acute{\iota}$ )、或いは、同義の形容詞  $\delta\acute{\iota}\sigma$  が用いられる。形容詞  $\mu\acute{\iota}\sigma$  /  $\mu\acute{\iota}\sigma\acute{\iota}$  は、本来は神々の形容に用いられ、苦難や死の運命を超えた至福な状態を形容する(ホメロス『イリアス』1.339; 『オデュッセイア』5.7; ヘシオドス『労働と日々』136; ピンダロス『オリンピア頌歌』1.52他)。他方、この形容詞は、神々にも比すべき幸運に恵まれ、卓越した功績を挙げた個人についても適用される(ホメロス『イリアス』3.192; 11.68; 24.377; 『オデュッセイア』5.7; ヘシオドス『神統記』954・955; ピンダロス『ピトニア頌歌』5.59; 5.11; プラトン『法律』12.669e他)<sup>(20)</sup>。この言葉

が表す幸福の度合いは、形容詞  $\delta\acute{\iota}\sigma$  よりも高く、人間が到達しうる最高の至福の形容と言える。

$M\acute{\iota}\sigma\acute{\iota}$  或いは、 $\delta\acute{\iota}\sigma$  という幸いの宣言の文学形式は、讃歌や頌歌等の詩文の中に見られ、非常に高揚した賞賛の言葉として機能している(ホメロス『デーメーテール讃歌』480・483; 『オデュッセイア』24.192; ピンダロス『オリンピア頌歌』7.11; バッキリデス『頌歌』5.50; エウリピデス『アルケースティス』915他)<sup>(21)</sup>。密議宗教においてこの定式は、入信の儀式を経た信者が霊的死と再生の体験を経た後に到達する幸いの境地を表現する(アプレイオス『変身』11.16 p. 270, 23・27; 22.0.284, 6・7; 23.0.285, 11・14)<sup>(22)</sup>。

#### 4. 結論

黙示録における幸いの宣言は、キリストの来臨に備えた幸いの宣言と(黙1: 3; 16: 15; 22: 7)、地上でキリスト教信仰に忠実に歩んだために殉教した人々に対してなされる天上の幸いの宣言(14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 14)に内容上大別される。前者の系列の幸いの宣言は、キリストの来臨に相応しい備えすることを勧める目的を持つ(黙1: 3; 16: 15; 22: 7)。なかでも、黙1: 3は、黙示録の文章を朗読する人と朗読された言葉を聞いて書かれていることを守る人の幸いが宣言され、文学作品としての黙示録への誘いの言葉となっている。

黙示録に出て来る信仰のうちに世を去った死者の死後の幸いを告げる幸いの宣言は(黙14: 13; 19: 9; 20: 6)、ユダヤ教黙示文学の幸いの宣言に非常に近い関係にある。黙示録の著者は、時が迫っているという強い終末意識の下に(1: 3)、二つの違ったタイプの幸いの宣言を使い分け、黙示の言葉を注意深く聞いて守ることを勧めると共に(黙1: 3; 22: 7)、迫害の状況下で殉教者が出る中で、小アジアの教会の人々に来るべき世界の勝利と祝福を告げて励まそうとしたと考えられる。

註

- ( 1 ) DCH 1.437-438; H. Cazelles, "אשרי", *ThWAT* 1.481-485; F. Hauck/G. Bertram, "μ ῆ σ" *ThWNT* 4.365-373; W. Janzen (1965), " 'Asrê in the Old Testament," *HTR* 58, 215-22; W. Käser (1970), " Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus," *ZAW* 82, 225-250.
- ( 2 ) J. T. Limburg, " Psalms, Book of," *ABD* 5.532-534; Käser, 229 を参照。
- ( 3 ) 詳しくは, E. Puech (1991), " 4Q525 et les péripécopes des Béatitudes en Ben Sira et Matthieu," *RB* 98, 80-106; G. J. Brooke (1989), " The Wisdom of Matthew's Beatitudes (4QBeat and Mt. 5: 3-12)," *Scripture Bulletin* 19, 35-41; J. A. Fitzmyer, " A Palesitnian Jewish Collection of Beatitudes," *idem*. (1992), *The Dead Sea Scrolls and Christian Origins* (Grand Rapids: Eerdmans) 111-118; J. H. Charlesworth (2000), " The Qumran Beatitudes (4Q525) and the New Testament (Mt 5:3-11, Lk 6: 20-26)," *RHPR* 80, 13-35; H. J. Fabry (2002), " Die Seligpreisungen in der Bible und in Qumran," in *The Wisdom Texts from Qumran and the Development of Sapiential Thought* (eds. C. Hempel / A. Large / H. Lichtenberger; Leuven: University Press) 189-200; 原口尚彰(2006)「死海写本 4Q185 / 4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号 41・68 頁を参照。
- ( 4 ) 詳しくは, Bill, 1.189; M. Hengel (1987), " Zur mattäischen Bergpredigt und ihrem jüdischen Hintegrund," *ThR* 52, 332-341 (=ders. (1999), *Judaica, Hellenica et Christianica: Kleine Schriften*. WUNT 109; Tübingen: Mohr, 224-233) を参照。
- ( 5 ) J. Dupont (1958-73), *Les Béatitudes* (3 vols; Paris: Gabalda); H. Frankmölle (1971), " Die Makarismen," *BZ* 15, 54-55; S. Schulz (1972), *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich: Theologischer Verlag) 76-84; R. Guelich (1976), " The Matthean Beatitudes: ' Entrance Requirements ' or Eschatological Blessings?," *JBL* 95, 415-434; G. Strecker (1984), *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht) 28-49; I. Broer (1986), *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein / Bonn: Hanstein); M. Sato (1988), *Q und Prophetie* (WUNT 2/29; Tübingen: Mohr) 254; J. Kloppenborg (1988), *The Formation of Q* (Philadelphia: Fortress) 172-173; U. Luz (2002), *Das Evangelium nach Matthäus (Mt 1-7)* (2. Aufl.; Neukirchen-Vluyn; Neukirchener Verlag) 271-272.
- ( 6 ) H. D. Betz (1995), *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress) 93・97 (以下では, *SM* と略記) 93・94; R. Guelich (1976), " The Matthean Beatitudes: ' Entrance Requirements ' or Eschatological Blessings?," *JBL* 95, 415-434.
- ( 7 ) E. Schüssler Fiorenza (1998), *The Book of Revelation: Justice and Judgment* (2<sup>nd</sup> ed.; Minneapolis: Fortress) 133-156; D. Frankfurter (1996), " The Legacy of Jewish Apocalypses in Early Christianity: Regional Trajectories," in *The Apocalyptic Heritage in Early Christianity* (eds. J. C. VanderKam / W. Adler; Assen: Van Gorcum; Minneapolis: Fortress) 133-136; J. J. Collins (1997), *Seers, Sybils and Sages in Hellenistic-Roman Judaism* (Leiden: Brill) 116-117; 原口尚彰 2003 黙示録 1 : 4・3 : 22 の書簡論的考察 : 両義性の文学的効果」『基督教論集』第 46 号 28・29 頁を参照。
- ( 8 ) Q 資料に出て来る語録の順序は, マタイによる福音書よりもルカによる福音書の方が忠実に保存しているため, Q の章節の番号はルカによる福音書の章節の番号で表記している。例えば, Q 6 : 22・23 とは, ルカ 6 : 22・23 のことである。
- ( 9 ) P. Vielhauer/G. Strecker (1989), " Apokalypsen und Verwandtes: Einleitung," in *Neutestamentliche Apoklyphen* (ed. W. Schneemelcher; 2 Bde.; Tübingen: Mohr) 2.515; 原口尚彰「黙示録 1 : 4・3 : 22 の書簡論的考察 : 両義性の文学的効果」『基督教論集』第 46 号 (2003 年) 31・34 頁を参照。
- ( 10 ) D. E. Aune (1997-1998), *Revelation* (3 vols; WBC 52A-C; Dallas: Word) 1.10・12 はこの用法の背後に典礼の影響を見ている。
- ( 11 ) Aune, 3.1205・1206 ; 佐竹明 (1989) 『ヨハネの黙示録』下巻, 新教出版社, 715 頁を参照。
- ( 12 ) Aune, 1.150.
- ( 13 ) Aune, 2.838・839 を参照。
- ( 14 ) 佐竹, 748・749 頁; S. R. Price (1984), *The Roman Imperial Cult in Asia Minor* (Cambridge: University Press) 123-126; 197-198; R. H. Worth (1999), *The Seven Cities of the Apocalypse* (New York: Paulist) 112-130; M. Griffin (2000), " The Flavians," in *Cambridge Ancient History* (vol.11; Cambridge: University Press) 81-82; C. R. Koester (2001), *Revelation and the End of All Things* (Grand Rapids: Eerdmans) 30-31; B. Witherington III (2003), *Revelation* (Cambridge: University Press) 5-10; 23-31.
- ( 15 ) 原口尚彰 (1998) 「パウロにおける ὁς ὁ ὅς / ἰς ἑνός」『パウロの宣教』教文館 196・200 頁を参照。
- ( 16 ) 黙示録の記述が神義論的要素を持つことについては, Koester, 29; Witherington, 40 を参照。
- ( 17 ) 村岡崇光訳 (1975) 「エチオピア語エノク書」『聖

- 書外典偽典4 旧約偽典 』教文館，220・221頁より引用。
- (18) 同250頁より引用。
- (19) J. H. Charlesworth (1983), *The Old Testament Pseudepigrapha* (2 Vols; Garden City, NY: Doubleday) 1.168 に提示されている英訳からの重訳。この本文は、短本文ではなく、長本文に基づいている。
- (20) F. Hauck / G. Bertram, “μάρτυρες,” *ThWNT* 4.365-373.
- (21) H. D. Betz, *Essays*, 30-33 ; idem., *SM*, 93-97..
- (22) D. Dormeyer (1998), “Beatitudes and Mysteries,” in *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins; Atlanta: Scholars Press) 345-357.

## The Beatitudes in the Book of Revelation

Haraguchi, Takaaki

There are two types of Beatitudes in the Book of Revelation. The first type exhorts the readers to be prepared for the coming of Christ at the end of time (Rev 1:3; 16:15; 22:7), while the second type pronounces heavenly blessings on those who lost their lives because of their faithfulness to Christ (14:13; 16:15; 19:9; 20:6; 22:14). The author of Revelation employs the first type of Beatitude to exhort the reader to listen to the words of revelation attentively, while he tries to encourage Christians in Asia Minor, under persecution, by promising them victory and heavenly blessings using the second type.

**Key Words** : Revelation, Beatitudes, the Coming of Christ, Persecution, Martyrdom